
ガイアエルフ戦記 in ゼロ魔ワールド

hate

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガイアエルフ戦記 in ゼロ魔ワールド

【Nコード】

N0652N

【作者名】

h a t e

【あらすじ】

エルフの亜種であるガイアエルフの王族ガイアグネは、異世界から来た西暦3199年の自衛隊の協力を得て、強力な機甲師団を作り上げた。ところが演習中に砂嵐に巻き込まれて、月が2つある世界に迷い込んでしまった。

エルフと獣人からなる機甲師団が迷い込んだのは、なんとゼロ魔の世界だったのだ。ガイアグネと彼女の夫である田中慎二は、果たしてどのようなトラブルに巻き込まれていくのだろうか。

プロローグ

プロローグ

砂漠の中を、戦車を主体とする機甲師団が進軍していた。ガルフ同盟軍第5機甲師団、総勢7000人の兵士達である。師団長は、ガイアエルフ族の中でも勇猛果敢で知られるガイアグネ少将だ。

ガイアエルフ族は、ダークナー帝国に滅ぼされる寸前のところを異邦人に助けられ、現在巻き返しをしている最中である。異邦人は未来世界の自衛隊であり、彼らのオーバーテクノロジーによって強力無比な兵器を得たガルフ族は、毎月1個師団を編成し、ダークナー帝国の強大な亜人の軍隊に対抗しようとしている。

今日は、その機甲師団による軍事演習を行う目的で、味方の迷惑にならない場所を目指して進軍しているところだ。今日も含めて何度か演習を行った後、第5機甲師団の兵士達の多くは新たに編成する機甲師団へ異動し、新兵を鍛えることになる。

先頭を走る戦車の中では、ガイアグネが難しい顔をしていた。

「おかしいな。さきほどから砂嵐が収まらない。本部への通信も届いていない。何か嫌な予感がする」

すると、ガイアグネの傍で座っている彼女の夫であり、軍事顧問でもある田中慎二が落ち着くようにと言う。

「まあ、そのうち砂嵐も晴れるんじゃないか。あんまり心配しても、

事態は好転しないと思うけどな」

慎二は、楽観的に考えようと言ってその場の雰囲気のを和ませようとした。だが、砂嵐はなかなか晴れなかった。それどころか、ますます激しくなっていく。

「このままではまずいな。全軍に速度を落として密集するように伝えろ」

ガイアグネは、勘に頼った指示を出す。これに対して慎二は苦笑はするものの、口を挟むことはしない。慎二の役回りは、求められた時に適切な助言をすることであり、いくら夫婦とはいえ余計な口出しはよくないと判断したからだ。慎二のこの判断は、結果的には正しかったのだが。

そうこうするうちに全軍を激しい振動が襲い、戦車内は何かに掴まっっていないと立っていられないほどまでに状況は悪化していた。さすがにこの時点で慎二も異常事態が起きていることに気付いたのだが、時既に遅し。自衛隊仲間と連絡を取ろうとしたのだが、軍用携帯通信機でも連絡が取れなくなっていた。

どんな事態でも通信が切れないのがウリの通信機が、どういうわけか通じない。慎二は内心パニックを起こしそうになったが、妻にみっともない姿を見せたくない一心でなんとか堪えようとした。だが、とうとう戦車の上下が逆になるほど激しくシェイクされるようになって、激しく頭を打って意識を失ってしまった。

慎二が目を覚ますと、ガイアグネがなんとか本部と連絡を取ろうと奮戦していたのだが、どうやらうまくいっていないようだった。戦車内には他に2人のガルフ族がいたが、彼女達は他の部隊と連絡を取って安否を確認していた。

「駄目だ。本部とは連絡が取れない。悪いが慎二、本部と連絡を取ってくれないだろうか？」

ガイアグネが万策尽きて慎二に頼んできたため、慎二は快く承諾した。だが、慎二でさえも連絡が取れなかった。

「あれ？おかしいな。仲間と連絡が取れないぞ」

ここで、慎二は背中に冷や汗が流れた。これって、なんだか一度経験したことがあるような気がしたからだ。するとそのとき、ガイアグネの部下がいきなり叫んだ。

「師団長、どうやら外の様子が変です。報告では、今は夜だそうです。しかも、月が2つあるというのですが……」

「そんな、バカな！」

驚いたガイアグネは戦車から顔を出す。すると確かに外は夜になっているうえ、赤い月と青いが出ているではないか。

「ねえ、慎二。いったい、私達に一体何が起きているの？」

真っ青になるガイアグネに、悲しいかな慎二は返す言葉が無かった。だが、慎二にはわかっていることがあった。ここは仲間がいる場所

から、遥かに離れた場所であると。

プロローグ（後書き）

★第5機甲師団の構成です。

師団長 ガイアグネ少将（7000人）

第51戦車連隊 連隊長ガイアグネ少将 500人 エルフとワー
ウルフ。全員女性。

第52戦車連隊 連隊長トリーネ大佐 500人 獣人中心

第53戦車連隊 連隊長トリーネ大佐 500人 獣人中心

第5特科連隊 連隊長イオナ大佐 1200人 エルフ。全員女
性。

第11普通科連隊 連隊長フィーネ大佐2000人 獣人中心

第5後方支援連隊 隊長サリナ大佐 1400人 獣人中心

第5施設大隊 大隊長イーダ中佐 700人 獣人

第5特殊偵察隊 隊長トア中佐 200人 獣人

第1話 情報を収集せよ

「どうしよう、慎二？」

いつもは気丈なガイアグネが、思わず不安を口にする。まあ、無理も無いだろう。いきなり月が2つになってしまうという普通ならあり得ない事態に現在進行形で遭遇してしまったのだから。ここで慎二は慌てず落ち着いて助言をする。こういう事態に巻き込まれたのは幸か不幸か初めてではないので、ガイアグネよりは慣れているからだ。

「とにかく、出来ることからやるしかないよ。兵士達が全員揃っているか、何か損害が発生していないかどうか確認すること。水や食料がどれ位あるか確認すること。周囲に敵がいらないかどうか索敵すること。とにかく部隊を運用するために必要な情報を、集められるだけ集めることかな」

慎二は自らの経験を踏まえて、情報収集を最優先するようと言う。もちろんガイアグネは、慎二の助言に従った。

「各連隊長・大隊長に告げる。各連隊・大隊の被害状況を報告せよ。最初に人的被害を報告せよ。しかる後に物的被害を報告せよ。以上、速やかに命令を実行せよ」

彼女は、命令を2つに絞ったうえに優先順位を明確にした。こういう非常事態に命令を乱発すれば、兵士達が動揺すると思ったからだ。続いて彼女は副官に対して、自らが連隊長を務める第51連隊の大隊長に対しても同じ命令を下すよう命じる。

それに続いて、以後は副官に第51連隊長代理として動くよう命じ

た。通常はガイアグネは師団長と連隊長を兼任しているのだが、こういう非常時には兼任は難しいだろうと判断してのことだ。

いったん命令を下すと報告があるまで多少時間が出来るので、彼女は自分なりに状況把握に努めることにした。戦車の上部ハッチから顔を出して周囲を見渡すと、整然と行進していたはずの戦車がひどい状況になっていた。バラバラの方角を向いていて、横転したり逆さになっている戦車も見られる。

「戦車が横転したり逆さになっているんだけど、どうすればいい？」

彼女が尋ねると、慎二は心配しなくて大丈夫だからと前置きをしてから話す。

「方法は2つある。ここから自動で師団の全車両をコントロールする方法と、各車両が任意にオートバランスのスイッチを入れる方法だ。僕としては後者を推すけどね」

「ああ、なるほど。そういえば、そういう方法もあると聞いたことがあったな」

慎二に指摘されて、ガイアグネは訓練中に横転したり逆さになった車両を元通りにしていた方法を思い出した。前者が緊急事態に取る方法で、後者がそうでない場合に取る方法であることもだ。そういうことは知識としては頭の中にあったのだが、慌てていてすぐには思い出だせなかったのだ。

「どうだ、そろそろ落ち着いてきたか？ だったら、俺は独自行動を取りたいんだが」

慎二は、彼女の同意を得てから戦車の外に出る。それからそつと地面の上に降り立つと、機械を地中に埋めたり地表に設置したりと大急ぎで作業を進めていく。

最初は情報収集に必要な機械を設置し、その後は水や食料を得るために必要な機械を設置していく。後者の機械は無駄になる可能性が非常に高いのだが、万が一の保険のために設置するのである。

いくら西暦3199年の科学技術が進んでいても、7000人からの食料や水を確保するのは非常に時間がかかる。だから今のうちに万が一のときのために準備をしておかないと、必要なときに間に合わない可能性が出てくる。そこでまず間違はなく無駄になることを承知の上で、急いで機械を設置しているのである。

そうして慎二が戦車の外で悪戦苦闘している間に、各連隊から報告が入り始めた。

「第5特殊偵察隊、兵士200人全員無事を確認しました！」

「第51連隊、兵士500人全員の無事を確認しました！」

「第5施設大隊、兵士700人全員の無事を確認しました！ただし、軽傷者が多数発生しています」

その後も報告は続いたが、とりあえず人的被害は皆無に近かったようだ。これは、今回の演習に騎兵を同行させなかったことも理由としては大きいようだ。もしも騎兵隊が同行していたら、人的被害は洒落になっていなかっただろう。

「各連隊長・大隊長に告げる。我が師団の人的被害は軽微であった。死者・行方不明者・重傷者いずれもゼロだ。負傷者はいるが、軽傷者のみである。続けて物的被害を報告せよ」

師団の被害が軽微であると知ったガイアグネは、弾んだ声で命令を下す。これで物的被害が少なければ、すぐにでもこの場を動くことが可能だ。もっとも可能だからといって、この場をすぐに動くわけではないのだが。

それからしばらくして、物的被害についても次々と報告があがってきた。

「第5特殊偵察隊、装甲車は全車異状なし！直ちに作戦行動が可能！」

「第51連隊、戦車・装甲車共に異状なし！」

「第5施設大隊、装甲車に異状なし！」

その後の報告によって、稼動出来ない車両は無いことが確認できた。これで、作戦行動は可能であることがわかった。となると、次は水と食料の確認である。

「連隊長・大隊長に告げる。我が師団の人的被害及び物的被害は軽微であった。続けて水や食料の数量を報告せよ。ただし、第5特殊偵察隊及び第52戦車連隊は、周辺の索敵を開始せよ」

ガイアグネは、水や食料の在庫を調査させるとともに、2つの部隊に索敵を命じた。現状で強力な敵の襲撃を受けたら、いくら強大な戦力を持つ機甲師団といえどもただではすまないからだ。何をするにせよ、安全を確保してから動くほうがいいと判断したのである。

こうして、落ち着きを取り戻したガイアグネによって、第5機甲師団はみるみるうちに立ち直っていったのである。

第2話 故郷を探して進軍せよ

人的被害や物的被害の報告、水や食料の数量の報告などが終わると、ガイアグネは全軍に仮眠するよう命じた。無論本当に全員が仮眠するのではなくて、交代で必ず誰かが起きているようにするのである。これは状況がよく分からないまま夜間に行動するよりも、十分に情報収集して、なおかつ明るくなってから動いたほうがいいとの判断からだ。

「思った以上に食料があって助かったな。これで水さえあればなんとかなる」

ガイアグネは、戦車の中に設置した簡易ベッドの上で、ほっとした様子で呟く。慎二の腕枕で、気持ち良さそうに横になりながら。一時の混乱から完全に立ち直った彼女は、少なくとも1か月以上の携帯食料があることを確認して、当面は命の心配をしなくていいことが分かり大いに安堵していた。

「まあな。しかし、油断は禁物だよ。この付近には、どんな強大な敵がいるのか分からないからな」

慎二は、安心して少し気が抜けたように彼女に釘を刺す。慎二は、自分と彼女の2人だけなら問題なく生き延びることが出来ると確信していたのだが、7千人もの兵士が一緒となるとさすがにそうもいかないとわかっていたのだ。

彼ら全員と無事に戻れるのだろうか。慎二は漠然とした不安を抱いていたが、ガイアグネには黙っていた。

翌朝、まだ日が明ける前にガイアグネは他の連隊長や大隊長の意見を聞いたうえで、部隊を3つ分けることにした。

第51連隊と第5特科連隊は西に進む。部隊の指揮はガイアグネが執り、兵士総数はおよそ1700人。

第52連隊、第5後方支援連隊、第5施設大隊と第5特殊偵察隊は、この地に留まる。部隊の指揮はトリーネ大佐が執り、兵士総数はおよそ2800人。

第53連隊と第11普通科連隊は東に進む。部隊の指揮はフィーネ大佐が執り、兵士総数はおよそ2500人。

部隊編成を終えた後、ガイアグネはトリーネとフィーネを呼び出した。

「トリーネ大佐は、ここでしっかり留守番をしてほしい。何か起きたら、直ちに連絡するように」

「はい、わかりました。きっちり留守番をしていますので、ご安心くださいね」

ガイアグネの命令を聞いて、トリーネは敬礼する。彼女はワーキャットで、左目が緑で右目が青のオッドアイである。肩で切り揃えられた髪の色はブルネットで、一見すると我侭な従妹風の可愛い娘だ。今は青いセパレートタイプのワンピースに、濃紺の胸当てと肩当て、

それに加えてマントと青いベレー帽を着用した姿である。

彼女はガイアグネやフィーネと比べるとあまり戦闘が得意ではないこともあり、この地に残って物資の探索と補給に力を注ぐことになった。

「フィーネ大佐は、あまり無理はするなよ。危険を感じたら、すぐに引き返すんだ」

「ええ、分かりました。無理はしないようにしますわ。まあ、大丈夫だと思えますけど」

ガイアグネの命令を聞いて、トリーネは心配性だわと言って笑いながら敬礼する。彼女はワールフで、血のように赤い瞳をしている。背中までかかる長い髪の色は濃い茶色で、一見すると幼馴染の元氣娘風の可愛い娘だ。今は赤いセパレートタイプのワンピースに、濃紺の胸当てと肩当て、それに加えてマントと赤いベレー帽を着用している。

彼女はガイアグネとは逆の方向へ行くことになった。

こうして、夜明けと共に3つの部隊が動き始めたのである。

ガイアグネの部隊が動いたとき、それを見つめる目があった。その目は軍の動きをつぶさに観察し、程遠い場所にいる人物に映像を送

っていた。そこには、怪しげな人物が集まっていた。映像を受けた人物は、その場に居る者達に見たままを話す。すると、話を聞いた者たちの表情が一変する。

「なんと、エルフ共が場違いな工芸品を保有していると」

「しかも、自在に動かしているというのか」

「それだけではない。奴ら、とうとう攻め込んで来る気なのだろう」話を聞いた者たちは、エルフが場違いな工芸品と呼ばれる兵器を大量に運用していると知って、恐れおののいた。正しく扱えば、無敵の強さを誇ると言われている場違いな工芸品を、エルフ共が自由自在に扱えば人間に対抗する術はなくなるかもしれない。彼らはみなそう考えたのだ。

元々エルフに対する偏見が強いハルケギニアでは、エルフが自分に向かってくるということは、殺人鬼が向かってくるよりも恐ろしいことだと思われている。仮にエルフが素手だとしてもそうなのだから、エルフが計り知れない威力を持つ兵器を携えて来るなんて、特上の悪夢そのものなのだ。

「ジュリオ殿。なにとぞわれらをお守りください」

「アルビオンでのあなたの活躍は聞いております」

「このとおり、頼みまする」

彼らはロマリアの神官であるジュリオに対して、一斉に頭を下げる。これにはジュリオも苦笑する。いくら頼まれたからといって、エルフを簡単に撃退できるはずがないからだ。とはいえ、教皇の部下としては断るわけにはいかない。相手がエルフなら尚更だ。

「まあ、頭を上げてください。微力ながら、私も力を貸しましょう」

ジュリオの言葉に、その場にいる者達は暗闇の中に一筋の光を見出したような、そんな安堵の表情を浮かべるのだった。

その後のジュリオの動きは早かった。教皇の使い魔であることを利用して、教皇の威光を笠に周辺の聖堂騎士隊を全員集合させて臨戦態勢をとると共に、かき集められるだけの戦力をかき集めた。ロマリア本国にも急使を送って、竜騎士や竜騎兵を集められる限り集めるよう要請したのである。

「おいおい、冗談じゃないぞ。これも無能王の策略のうちか？このままだと、この辺り一帯はエルフに奪い返されてしまう」

ジュリオは、エルフがガリアに向かわないことを不審に思っていた。それも無理はない。ガルフ軍は、偶然ながらロマリアの方向に向かっていただけだ。ジョゼフが密かにエルフと会っているという噂はジュリオの耳にも入っており、ジュリオの頭の中ではジョゼフとエルフが手を組んでいることは、もはや確定事項になっていた。

「あとは、どれほど兵士を集められるかにかかっていますね」

ジュリオの部下は、そう言いながらエルフを恐れて震えていた。

こうして、戦いの時は刻々と迫っていた。

第3話 戦いの前に、種付けせよ

1700人もの兵士の移動ともなると、そうそう簡単にはいかないものだ。補給が万全であってもそうなのだから、現在の補給がまったく期待出来ない状況ではさらに難しい。ましてや砂漠の中を、当てもなく行軍するのだから。

ガイアグネは、慣れない土地であることも考慮して、進軍速度をかなり緩めていた。幸い水に関しては、夜の間に空気中の水蒸気を強引に集めることでなんとか解決できていたのだが、少しでも多く水を集めるために夜営地には日没と共に設営することになっていた。

しかし、解決できない問題も多かった。そのうちの一つが臭いである。飲用水を確保するのが精一杯と言う状況なので、身体を洗うための水などありはしない。ところが砂漠は暑く汗をかくので、どうしても臭いが強くなる。

おかげで戦車や装甲車の中は臭いが充満することになるのだが、迂闊に車両の外に出ていると危険が大きいので出るのを禁じている。そのため体調を崩しかけている者が出ているという。特にワーウルフは臭いが強いいため、かなり悲惨な状況になっているようなのだが、打つ手なしである。

他にも様々な問題が山のように発生し、ガイアグネの頭を悩ませている。その相談を慎二が請け負っているのだが、慎二もエルフや女性特有の問題には疎いこともあり、彼女の相談になかなか応じ切れていない。

「ねえ、慎二。困ったよう、どうしよう」

「うーん、困ったねえ。何かいい解決方法はないかねえ」

などという話を何度もしているのだが、なかなか解決しない。本来そのような問題は部下の誰かを責任者にして一任すべきなのだが、二人はそうしなかった。おかげでそのツケは後で大きく返ってくるのだが、今の二人には知る由もなかった。

一方、ジュリオはなんとか数千人の兵士を集めることに成功していた。アウソーニャ半島のロマリア本国からは時間の関係で兵士を運ぶことが出来なかったが、近隣のロマリアと友好関係にある都市国家から、かき集められるだけかき集めたのである。

他にも竜騎士や竜騎兵は集められるだけかき集めたが、いかんせん絶対数が少なかったので30騎がせいぜいだった。それもアルビオンで共に戦った第3竜騎士中隊のメンバーをほとんど集めることは出来たので、ようやくそれだけの数になったのである。ジュリオはアルビオンの義勇軍に参加して良かったと、この時心の底から思うのだった。

ジュリオは、兵士を1か所に集めると派手な演説をぶちかました。そして、攻めこんでくるエルフの軍勢から家族や友人を守ろうと呼びかけた。

「勇者の諸君！エルフ共の魔の手から、家族を、友人を、そして大

切な人を守ろうではないか！」

ジュリオは兵士達の勇気を褒め称え、君達の活躍によってエルフ共を追い返そうと繰り返し兵士達に呼びかけた。兵士達はジュリオの演説を聞くうちにだんだんとその気になり、彼の演説が終わる頃には今にもエルフと戦おうという気になっていった。

演説が終わると、ジュリオは兵士達に今夜はゆっくりと休むように呼びかけた。可能であれば、愛する人や家族と一緒に過ごすことを勧めたのである。そのような人が身近にいなければ、酒場で杯を酌み交わすのもいいだろうと言った。今夜は、この場の兵士達はタダで酒を飲めるように手配したと言うと、兵士達は熱狂的な拍手をジュリオに送るのだった。

実際には、ジュリオは兵士達がタダで商売女を抱けるように手配していたが、それは流石に公の場では言えなかった。おかげで恩恵に与った者は思ったより多くなかった。

ちなみに、妻子がいる兵士は家族と一緒に過ごしたのだが、それらの妻のうち2割ほどが1年後に赤ん坊を産むことになる。

演説の後の身の振り方は様々だった。平民の兵士達の多くは、酒場で楽しく酒を飲んで恐怖を忘れようとした。妻や子供がいる兵士は、家族と共に過ごすことを選んだ。だが独身の若い兵士の多くは、意中の女の子に愛の告白をしていた。

そうなることを見越していたジュリオは、明日出撃する兵士から愛の告白を受けたならば、兵士に勇敢に戦うよう確約させたうえで進んで告白を受けるようにとのお触れを出していた。

少しでも兵士の士気を高めようとの苦肉の策であったが、教皇の名前を出したことから熱心なブリミル教徒の女性への影響は絶大だった。彼女達は神の祝福を受けた兵士に対して、進んで自らの身体を捧げたのである。

この日、都市に住んでいる若い女性の多くが、若い兵士と夜を共に過ごした。兵士達は命を懸けて貴女を守るために戦うと誓い、女達は彼らに愛しているわと囁いたのである。

女達は、エルフ相手に戦うことが何を意味するのか知っていた。兵士がまず生きて帰らないことを。だから神に祝福された兵士の人生最後の相手に選ばれたことを光栄に思い、喜んで兵士に抱かれたのである。彼女達の多くは後日赤ん坊を産むことになるが、赤ん坊が父親の顔を見ることが出来るかどうか、それは今は誰も知らない。

ジュリオの仕事は、演説では終わらなかった。彼は兵士以外にも大勢の人間を集めていたのだ。彼は竜騎士や竜騎兵を集めると、とある広い部屋に案内した。そこにはロマリア各地から集められた、若く美しい女が笑顔で待っていた。

彼女達は、自分達の役割を聞かされていた。若干の例外はいたが、基本的に彼女達は志願してきたのだ。エルフと戦い間違いなく死ぬ

運命にある勇者達に、一晚の安らぎを与えるために。

部屋に入るときは怪訝な表情をしていた男達も、若く美しい女性ばかりが集まっているのを見て頬を緩ませた。一応名目は壮行会であったので食事や酒も用意されてはいたのだが、男達はそれには目もくれずに女達を口説きにかかった。

女達もしっかり自分の役割を理解していて、好みの男から話かけられると心の中で即決して、気分が悪いから寝室まで送って欲しいと男に言う。そんなカップルが1組出来ると、ようやく男達も彼女達が何のためにここにいるのか理解したようだ。男達は競って女達を口説いて、次々と部屋から消えていく。

そうして1時間もしないうちに部屋からは男女の姿は消えていた。おそらくは全員が、寝室でお楽しみの最中なのだ。この日集められた女性のうち、5割以上が1年後に赤ん坊を産むことになるが、彼女達の多くは未婚の母になる運命だった。

更にジュリオは、メイジに対しても同様の便宜を図っていた。お相手は、ロマリア各地から集めた娘達である。ぶっちゃけた話、特に美しい娘30人を竜騎士や竜騎兵にあてがったのであるが、メイジの相手を務めた娘達もそこそこ可愛い娘だった。もちろんメイジたちは、喜んで若い娘と最後の夜を過ごしたのである。

こうして兵士の集ったこの都市は、この日あちこちで盛んに種付けが行われることになり、1年後には大勢の赤ん坊が誕生することになり、

なるのだった。

こうして、戦いの前夜は過ぎていった。

第4話 闇夜に乗じて、奇襲せよ

夜明け前に兵士達は集合し、都市を出発した。兵士達は親兄弟と、妻や子と、恋人や昨夜初めて肌を合わせた女と、それぞれ涙ながらに別れを告げた。

ある兵士は親に今まで育ててくれてありがとうと礼を言い、親の号泣を招いた。別の兵士は、兄弟姉妹には自分が死んだ後親の面倒を見るように頼み、お互いに抱き合って泣いた。

ある兵士は、妻や子供に頼ずりしてぎゅうっと抱きしめた。いつ帰ってくるのと無邪気に問いかける子供に、お父さんはこれから遠いところに行くんだよ、だから忘れないようにお父さんの顔をしっかりと良く見るんだよと、妻は涙を流しながら言う。早く帰って来てねとせがむ子供に、父親は必ず帰ってくるよと嘘でも言うことができず、ぎゅうっと抱きしめることしかできない。

ある兵士は、恋人に君と出会えて幸せだった、もう思い残すことは無いと別れを告げた。女は、絶対にあなたの子供を産むからと男に返し、嗚咽と涙で顔をくしゃくしゃにする。別の兵士は、昨夜初めて肌を合わせた女に男にしてくれてありがとう、これで心置きなく神の御許へ行けると礼を言う。女は、神に仕える戦士の役に立てて嬉しかったと返す。

そんな光景が、至るところで見られた。

兵士達は、家族や愛する者達を守るため、命を捨てて戦う決意を固めていた。最後の一人になっても戦って、戦い抜いて死ぬつもりだ

った。だが、エルフとの間には、絶望的な戦力差があることを誰もが知っていた。

兵士達が出撃した後、ジュリオは戦闘能力の無いメイジと共に使い魔を使って敵の偵察をしていた。これまでの敵の進軍速度から、ある地点を会敵地点と予想し、そこで奇襲をかけるつもりだったからだ。

「ジュリオ様。敵の速度は変わりません。このままだと、あと2日でこの地に来てしまいます」

青い顔をしたメイジの言葉に、ジュリオは軽く頷く。彼に言われずともわかっていた。エルフの軍勢が、すぐそこまで来ていることなど。そして、敵の進軍速度は何かのきっかけで簡単に変わり、予想を大きく外す可能性があることも。

「ええ、分かっていますよ。エルフ共が変わった行動を取らないよう、神と始祖ブリミルに祈ってください」

ジュリオはそう言うと、竜騎士隊のもとへ向かうと言ってその場を去った。

悪いことに、ジュリオは一般人が知らないことも知っていた。例えば、過去にトゥールの戦いで7千のガリア・トリステイン連合軍が戦ったのは、一般に知られている2千のエルフではなく5百のエルフ

フであったこと。ここに向かっているエルフの集団が、明らかに訓練された軍隊であることや、場違いな工芸品を多数擁していることなど。

それらから導かれる結論は、底なしの絶望。今回の戦いでは、誰一人生きて戻れそうにないということ。ゆえにジュリオは教皇に今生の別れを告げ、自分が死んだ後は新しい使い魔を召喚しよう懇願した。

むろん教皇はそんなことは認めなかったけれど、ジュリオは自分の意思を押し通した。ここでエルフの数を多少なりとも減らしておかないと、ロマリア本国は阿鼻叫喚の地獄へとたやすく変わってしまうのは必然だからだ。自分と同じ境遇の孤児を、これ以上増やしたくない。ジュリオはその一心で、自らの命を捨てる覚悟をしたのだ。

「だが、サイト。お前が来てくれれば、少しは勝ち目があったろうに」

一体どんな奇跡が起きたものか、7万の軍勢を足止めしたトリステイン救国の英雄を思いだして、ジュリオはため息をついた。一応援軍を依頼したのだけれど、返事は無かった。サイトとルイズのコンビがいれば、やりようによっては互角に戦える望みがあったのだが、今となっては無いものねだりにすぎない。

「しかし、やってくれるよな。あの無能王は。アルビオンの次は、ロマリアか。今度はエルフと組んで、ロマリアを滅ぼす気か？」

ジュリオは、今回の件はガリア王ジョゼフの仕業だと信じて疑わなかった。ジョゼフが怪しげなエルフと何度も会っているという情報が入っているからだ。アルビオンの反乱も、裏でジョゼフが糸を引

いていたこともわかっている。反乱を支援した目的が、始祖のオルゴールを手に入れるためであったであろうことも。

ジュリオの考えは当たってはいなかったけれど、的外れというわけでもなかった。実際ジョゼフはロマリアを滅ぼそうとして、ヨルムガンドという超兵器の開発を進めているからだ。

その頃、当のサイトはシルフィードからタバサを助けて欲しいと頼まれていた。ジュリオから援軍を求める手紙は、まだサイトに届いていなかったのも、サイトがジュリオを助けにロマリアに来るなどという事態にはならなかった。まあ、たとえ届いたとしても、サイトが助けに来たかどうかは怪しいものなのだが。

と言うわけで、ジュリオは絶望的な状態で戦いに臨むこととなる。

夕日が沈むと、ガルフ軍は野営の準備を始めた。野営とはいってもテントを張るわけではなく、戦車を外周に配置した円陣の中に装甲車を並べるだけである。夕食の準備も大したことはしない、というか出来ない。携帯食料しかないのも、炊き出しのようなことは出来ないからだ。

「はあっ、味気ない夕食ね」

ガルフ軍のガイアグネ少将は、いけないと知りつつも、つついこぼしてしまう。ここ数ヶ月は以前と比べて食料事情が良かったものだから、なおさら貧しい食事が堪えてしまう。しかし、周りの者は

違う意見を持っていたようだ。

「味気ないのは、誰かさんがいないせいじゃないんですかね？」

暗に、夫である慎二がいないので食事が味気なく感じるのではないかと部下が軽口を叩く。それを聞いて、ガイアグネはむっとする。

「あのねえ。そういう悪いことを言う口は、この口かあっ！」

そう言うなり、彼女は部下の頬を両手で掴み、びよーんと横に伸ばす。

「ひ、いたいですっ！や、やめてください！」

部下はたまらず懇願する。どうやら部下は、上司のご機嫌をかなり損ねてしまったようだ。

「こんな時はね、余計なことは言わないものなの」

ガイアグネは、笑って言う。部下の頬を引っ張って気が済んだのか、機嫌は元に戻ったようだ。さきほどまでの不機嫌が、一気に吹き飛んでいる。

「そうそう。ガイアグネ様は、辛気な顔より笑っている顔の方がいいですよ」

部下が言うのも、もったもかもしれない。ガイアグネの歳は10代後半だろうか。他のエルフと比べて背が高く、美しい顔は気品にあふれているにもかかわらず、それでいて精悍な雰囲気も漂わせる少女だった。肌は雪のように白くつやも良くて、まさに特上の美少女

なので、笑顔の方が良く似合うのだ。

「そうそう。慎二様も、惚れ直すかも」

もう一人の部下も、ガイアグネの弱点を突いてきた。彼女は結婚してからまだ日が浅いせいもあって、夫の慎二とは恋人同士のように熱い仲なのだ。なので、普通の夫婦には効果が無いようなからかいも、結構有効だったりするのだ。

「おだてても、何も出ないからね」

そう言いつつも、ガイアグネの顔はほんのり赤くなっていた。

さて、夫の慎二が何をしているかというと、水の補給の準備である。水に関しては、夜の間に空気中の水蒸気を強引に集めているので、少して早く装置を設置しなければならなかった。ところが、この装置の設置及び調整は、慎二以外の者には出来ない。それゆえ、夜営地設営と共に慎二は大車輪で働く羽目になっていたのである。

「ふうっ、これで最後か」

ようやく全部の装置を設置し終わる頃には、日没から2時間ほどの時間が経過していた。それでも慣れてきて早くなっているが、最初は4時間近くかかっていたものだ。それからすると多少は楽になっているはずなのだが、当の慎二は先が見えないこの行軍に精神的に疲れきっていた。

「この先に、俺達が落ち着ける場所はあるのだろうか」

慎二は、今の状況がかなり異常な状態であることはわかっている。自衛隊の仲間達の元へ、二度と戻れない可能性の方が高いことも。

慎二は、西暦3199年に自衛隊所属の護衛艦に乗って任地へ向かう途中で、どういうわけかエルフ同士が争う惑星へと迷い込んでしまったが、そのときは大勢の仲間と一緒にだったので心細くは無かった。頼れる上司もいたので、なんとかなさりと楽観的な気持ちでいられた。だが、今はその両者が失われたばかりか、妻と大勢の部下を守らなければならないという責任が重くのしかかっている。

なかでも、自分の部下の妻10人と友人の部下の妻10人を預かっていることが、慎二の心に特に重くのしかかっていた。部下達の多くは幸せな結婚を心の底から喜んでいて、なかには妻の妊娠を知って泣いて喜んだ者もいるのだ。彼女達の夫は、慎二を信じて妻を自分に預けている。その信頼には、必ず応えなければならぬのだ。

「彼女達を、必ずガルフの地に戻さなければ……」

慎二は、心の中で固く誓う。彼女達を、必ず夫の元に送り届けてみせると。

その日の深夜、ジュリオは竜騎士の部隊を率いてエルフ軍へと向かっていた。敵に気付かれないように、ある程度の高度からなるべく

音を立てずに滑空するようにして近づいていく。彼らが最初に狙うのは、仲間から離れたエルフだ。お尻を丸出しにしてしゃがみこんで、プリプリと音を立てているエルフや砂漠に水のような液体をかけているエルフ達である。

ジュリオの合図を引き金に、竜騎士が一斉に彼女達に襲い掛かる。次の瞬間、エルフ達の絶叫が辺りに響き渡った。火達磨になって転げまわるエルフを見て、ジュリオは恐怖で引きつった笑いを浮かべる。彼はこの時、既に分かっていたのかもしれない。エルフの復讐が、凄惨を極めるであろうことを。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0652n/>

ガイアエルフ戦記 in ゼロ魔ワールド

2010年10月10日21時31分発行